

## 「イコニオンでの宣教」

2016年06月15日

使徒言行録 14章 1節～7節。イコニオンでも同じように、パウロとバルナバはユダヤ人の会堂に入って話をしたが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。ところが、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。それでも、二人はそこに長くとどまり、主を頼みとして勇敢に語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側について。異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人に乱暴を働き、石を投げつけようとしたとき、二人はこれに気づいて、リカオニア州の町であるリストラとデルベ、またその近くの地方に難を避けた。そして、そこでも福音を告げ知らせていた。

アンティオキアから追い出されたパウロとバルナバは、アンティオキアの南東 140 km にあるイコニオンにきた。140 km をおそらく徒歩で行ったであろう。どこまででも行って、宣教したいという熱意はどこから来たのであろうか。ただ、敬服するのみである。二人は例によって、安息日にユダヤ人の会堂に入り、主イエスの福音を語った。すると、福音を受け入れ、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。宣教は大きな実りを得た。

ところがそこでも、二人の宣教に激しく反発するユダヤ人たちが異邦人たちを扇動し、悪意を抱かせるように画策した。それでも、二人はイコニオンに留まり、神の助けを信じ、勇敢に福音を語り続けた。主イエスは二人の口と手を通して、恵みの言葉を証しさせ、不思議な業を行わせた。宣教における主体はあくまで主イエスである。

二人の宣教は町の住民を分裂させ、ある者は宣教に反発するユダヤ人側につき、ある者は使徒たちの側につくような状態を生み出した。ここでは、パウロとバルナバを「使徒」と記している。使徒言行録の著者は 12 弟子たちを「使徒」と言っているが、パウロとバルナバを使徒と書いているのは、極めて異例である。

二人の宣教は町の住民を二分した。主イエスが現した福音も聞く者、見る者を二分した。福音を信じた者は神からの生の是認を聞き、隣人を見出し、生きる喜びと力に与ることができる。拒絶した者は生の根拠を見出せず、退廃と虚無の中に沈んでいく。神の言葉は受け入れる者と拒絶する者とを分水嶺のように右と左に分ける。

ヨハネ福音書 18 章に、主イエスがローマの総督ピラトから尋問されるシーンがある。主イエスは最後に「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世にきた。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」と述べている。聖書が告げる「真理」とは神はあなた方を愛しているということである。神から愛されている真理を知る者は主イエスに聞き入り、この世の諸々の価値観から解放され自由を得る。この自由を得させるために主イエスは神から遣わされたのである。

パウロとバルナバの宣教を拒絶したユダヤ人たちは、神の選民であることを誇るユダヤ教の宗教体系の枠から抜け出ることができなかった。彼らは町の指導者たちを抱き込み、二人に乱暴を働き、石打ちの刑を執行しようとした。これに気づいた二人は難を避け、リカオニア州の町のリストラとデルベ、またその近くの地方に逃れた。しかし、逃れたその地で、福音を告げ知らせた。迫害を受けながらも、福音は確実に根付いていった。迫害はマイナスだけではなく、次々と新たな宣教地を見出していったのである。